
うさぎとバニラ

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うさぎとバニラ

【Nコード】

N1463G

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

祖母の住む田舎町に引っ越してきてから、放課後になると甘味処へうさぎ堂へ通うことがはすみの日課になっている。そこでは、無愛想なクラスメイトが店番をしていて……。

木枠の歪んだガラス戸をがたがた鳴らしながら開けると、いつものように愛想のない「いらっしやい」に出迎えられた。

どこか埃っぽい古びた家のおいに混じる甘い香り。カウンターに頬杖をついて漫画雑誌を読んでいるクラスメイトの姿を見つけ、はすみは苦笑いを噛み殺した。

「やる気なさすぎだよ、宇佐美くん」

「……なんだ新條、また来たの？」

宇佐美晴人は眠たげな目を瞬かせると、困ったように伸び放題の前髪を掻き上げた。読みかけの漫画雑誌を、ページを開いたまま裏返す。

「来ちゃ駄目なの？」

「別に、そうじゃないけど……」

はすみはカウンターの上に両腕を重ね、更に顎を乗せて晴人の顔を覗きこんだ。途端に彼は居心地悪そうに視線を逃がす。

「わたしが来たせいで店番サボれなくなったって思ってるでしょ」

「……思ってるない」

「凶星だ」

笑うはすみに、晴人はぶっきらぼうに尋ねた。

「ご注文は？」

「いつものやつお願いしまーす」

はすみは、カウンターから続いている隣のガラスケースをとんとんと指先で叩いた。冷気のこもったガラスケースの中では、色とりどりのアイスクリームがコーンに乘せられるのを待っている。

晴人はカウンターの向こう側からガラスケースを開けると、専用の掬い器と薄紙に包まれたコーンを手に取った。彼が慣れた手つきで掬い取ったのは、白いバニラ・アイスクリームだった。

「ほら」

「わあい、ありがとう」

すっかり憶えてしまった金額を払ってアイスクリームを受け取ったはすみは、いそいそと店の隅に置かれたベンチに移動した。

「いただきます。……うーん、冷たい。おいしー」

ひとつ舐めると、舌尖から冷たさと、続いて濃厚な甘さが広がる。はすみはだらしなく頬をゆるめた。

そんな彼女の様子を、晴人は呆れたような感心したような顔で眺めていた。

「新條って変わってるよな」

「ええ？」

「うちの店で毎回飽きもせずバニラ頼むの、おまえぐらいだぜ」

この〈うさぎ堂〉は、町で唯一の甘味処である。甘味処といっても、駄菓子その他にアイスクリームやかき氷も売っている程度の小さな店だ。

晴人は店主の孫息子で、年老いた祖父の代わりによく店番をやっている。そのせいか、彼は友人たちから『うさぎ』と呼ばれていた。本人はいつも顔をしかめているが。

春のはじめに祖母の住むこの田舎町に引っ越してきて以来、放課後になるとこうして〈うさぎ堂〉に足を運ぶことがはすみの日課になっていた。必然的に晴人と顔を合わせることも多くなる。

町を囲む山々は鮮やかな緑に染まり、夏の気配が日に日に強くなっていく。セーラー服の白い半袖からは、少女のほっそりとした二の腕が覗いていた。

「だってバニラが一番好きなんだもん」

「それが変わってるって言ってんの。バニラって味がシンプルすぎて、つまらないって人気ないんだぜ」

はすみはアイスクリームから口を離した。晴人はいつの間にか再び頬杖をついている。

「……似てるから、かな」

ぽつりと呟き、はすみはぎこちなく微笑んだ。

「わたしとバナラって、なんだか似てるんだ」

——あんたって、本当につまんない子

落胆するような、なじるような、それでいてどうでもよさげな母の顔を思い出す。あたしやあの人と別れようと、家族がどうなろうと、あんた別にかまわないんでしょ？

はすみは、何も言えなかった。

違う、そうじゃない。そんなわけない。むしろそれはお母さんでしょ？ 自分だけが大切なんでしょ？ 濁流のような思いが喉を詰まらせるほどだったのに、何ひとつ言葉にできなかった。

口にしたところで何も変わらないと、最初からわかっていたから。だからずっと黙っていた。両親の間で娘の押しつけ合いが始まる前に、自分から祖母の許へ行くと切り出した。

すべてがこのアイスクリームのように、優しく簡単だったらよかったのに。

現実はややこしくて苦いばかりで。何度舐めても、バナラの甘い味にごまかされてくれない。

「みんなに嫌われてるなんてかわいそうだから、せめてわたしだけでも好きでいてあげないと」

必要ないと捨てられても、自分が自分であることをやめることなんてできない。——やめたくない。

自分を好きだと言える、人間になりたい。

「……ふうん」

わずかな沈黙のあと、晴人は素っ気ない声を洩らした。はすみは居心地の悪さを隠すように、もう一度アイスクリームを舐めた。

そのまま漫画雑誌に戻るかと思われた晴人の口から、ふと言葉が続いた。

「確かに人気はないけどさ」

「え？」

「嫌いなやつばかりじゃないだろ。——俺もバナラ、結構好きだぜ」

驚いて顔を上げると、彼は素早く誌面に視線を逃がした。俯いているせいで表情は見えないが、ぼさぼさの髪から覗く耳は赤く染まっている。

その色が自分にも移ったのが、徐々に顔を覆っていく熱とともにはつきりとわかった。

手元のアイスクリームは溶けはじめている。伝いかけた雫を舐め取るように口づけると、さっきよりもっと甘かった。

泣きたいような笑いたいような、溢れてくる感情に溺れながら、はすみはようやくと言った。

「あのね、宇佐美くん」

「何？」

「わたしも……『うさぎくん』って呼んでいい？」

晴人は顔を上げないまま答えた。

「……好きにすれば」

それでも更に赤くなった耳が、その想いを何より教えてくれる。はすみは思わず声を立てて笑いながら、またアイスクリームを舐めた。

苦い痛みが甘くなるまでには、もう少し時間がかかりそうだけだ。ど。

ここに通うもうひとつの理由をいつ打ち明けようか、このバニラを味わいながら考えるのも悪くないと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1463g/>

うさぎとバニラ

2010年10月8日15時52分発行